

ニュージーランド報告

高 崎 みどり

7月27日から8月19日まで、文教大学文学部日本語日本文学科学学生の日本語教育教育実習について行き、クライストチャーチ市に滞在した。その間の体験を簡単に報告する。

1). 高校見学

Catholic Cathedral College, Burnside High School, Middleton Grange High School, それに、高等部ではなかったが、Medburry Boys Schoolも見学した。日本語の授業や英語の授業などである。先生も生徒も熱心だが、日本の語学のクラスに比べ、ずっとリラックスしている。順番にあてて言わせる、というより「これは何と言いますか?」と聞いて、わかる者が一斉に賑やかに答える、といったやり方で、先生も文法や背景の説明に余り時間をかけず、簡単な言い方の例文でどんどん進めていた。生徒もあまりノートをとらず、言い方として自然に身につけてゆくという態度のようである。筆者も傍観は許されず、会話の相手や発音・イントネーションのモデル等を先生の命ずるままにつとめた。生徒は自分達の日本語が先生以外の日本人に通ずるのがとても嬉しいらしく、簡単な対話でも喜んで行っていた。

2). 日本語クラス

Christchurch College of Education の Clear Clark 先生の日本語のクラスもお手伝いした。卒業後、高校などの日本語の教員になる学生達である。事前に予期しなかったので何も準備がなかったが、少人数(6人)であったのと、学生達が熱心であったので、何とか少しは貢献できたかもしれない。Clark 先生が「まかせる」とおっしゃってくださったので、学生の理解度を手さぐりしながらも結構自由にできた。内容は、

①筆者が自己紹介と日本についての話をし、その内容について、筆者があとから学生にいくつかの質問をし、理解の程度を確かめる。

②学生に口頭で自己紹介をしてもらい、そのあと同じ内容を文章の形に書き

てもらう。それを添削して返す。

③「山田一郎」という日本人の学生の生活や考え方について説明文風に書いたものを読みあげ、理解を試す質問をする。あとでその文章のコピーを配る。

④日本人の一年の行事と生活について、国際交流基金の写真パネルを使って説明し、あとでその内容について質問する。学生の質問にも答える。

⑤会話練習Ⅰ、〔明日、勉強のことで鈴木先生に相談したいことがあるので、約束をとりつけるために先生の家へ電話をする〕という想定で、学生2人1組となり、挨拶、取り次ぎを頼む、約束をとりつける、都合のよい日時・場所についてのやりとり、終わりの挨拶などを自分たちで考えさせ、まとまったら2人に場面を演じさせる。それを訂正したり説明を加えたりした後、直したものをもう一度演じさせる。

⑥会話練習Ⅱ、お正月の場面の年始訪問の写真パネルを使い、日本の訪問の習慣を説明した上で、2人1組で会話を作らせ、場面を演じさせる。訂正・再演は⑤に同じ。

⑦会話練習Ⅲ、写真パネルを使って、スキーに行った学生どうしの会話、衝突、骨折、入院、お見舞の各場面を説明したあと、会話を作らせて演じさせる。訂正・再演は⑤・⑥に同じ。

⑧最後の授業で、日本や日本語についての質問を何でもして下さい、という時間を設けた。「カギっ子」「試験地獄」「塾」「宗教」「家賃などの物価」「元号」などいろいろな質問が出た。

最後に学生達に日本語を学び、又教えることについて短い文章を書いてもらったが、その中のセーラ・キンバリさんのものを紹介する。(表記等、すべて原文のまま)

わたしの名前はセーラ・キンバリです。わたしは二十二才です。わたしは大学の一年生です。四年、日本語を勉強しています。日本語がすきです。日本のぶんかとせいかつはとてもおもしろいです。日本語のかんじはむずかしいです。日本語の先生になりたいです。高校で日本語を教えたときに(筆者注：教育実習)とてもたのしかったです。たくさんのせいとはとてもおもしろ

ろかったです。

3). 小学校で

一緒に行った息子(10才)が三週間だけだがお世話になった、Iram Schollで、日本についての“Show and Tell”をやった。

はじめに日本について知っていることを聞くと、やはり自動車をはじめとする工業製品や過密ということなどをあげていたが、人口密度がニュージーランドの1戸あたり12人に対し、日本は322人だというと、一斉に「ワッ」と驚かれてしまった。

ここでも写真パネルを使い、日本の子供たちの一年の生活をスケッチ風に紹介した。五月の鯉のぼりには特に関心が集まった。次に1から10までの数、「おはよう」「こんにちわ」等の簡単な挨拶、「春が来た」の歌を教えた。一番喜ばれたのは、1円玉から1万円札までの日本のお金の紹介で、皆の間を回してもらったので、すごい騒ぎだった。

後日、Iram Scholl の子供たちから手紙をもらったので、一部紹介したい。(表記等すべて原文のままだが、差出人住所など一部を省略した。)

Dear Mrs Takasaki

Ohayoo. Thank-you for coming into room 1 on Wednesday. I enjoyed you teaching us some Japanese. My mum learns Japanese on Thursday. She would like the information you gave us. (以下略)

Dear Mrs Tawasaki

Thank-you very much for coming and talkng to us about Japan. I liked the photos and the money best. I would like to taste some rice cakes sometime. I would also like to visit Japan and learn some more Japanese language. I enjoyed your talk very much. (以下略)

以上、雑然とした報告になってしまったが、日本語教育から久しく遠ざかっていた私としては、教師が本当に必要とされている授業というものを久しぶりに体験したという思いが残っている。

クライストチャーチは、7月8月は冬から春にあたり、梅や桜が澄んだエイボン川の畔に咲いていた。俳句を趣味とするニュージーランド人がいていくつか作品を見せてもらったが、季節がずれていると季語などと言うことはあまり意味をなさなくなってくる。こうした人たちに伝えるべき俳句のエッセンスとは何なのだろうか、と、専門外のことながらしばし考えこまされた。そして、ことばの勉強というのは、ことばだけを見ていては出来ないものなのだ、という当たり前の事を心から実感した。

なお、今回の教育実習そのものについての報告は、毎年文教大学日文科で出している報告書があるのでそちらの方を参照していただければと思う。